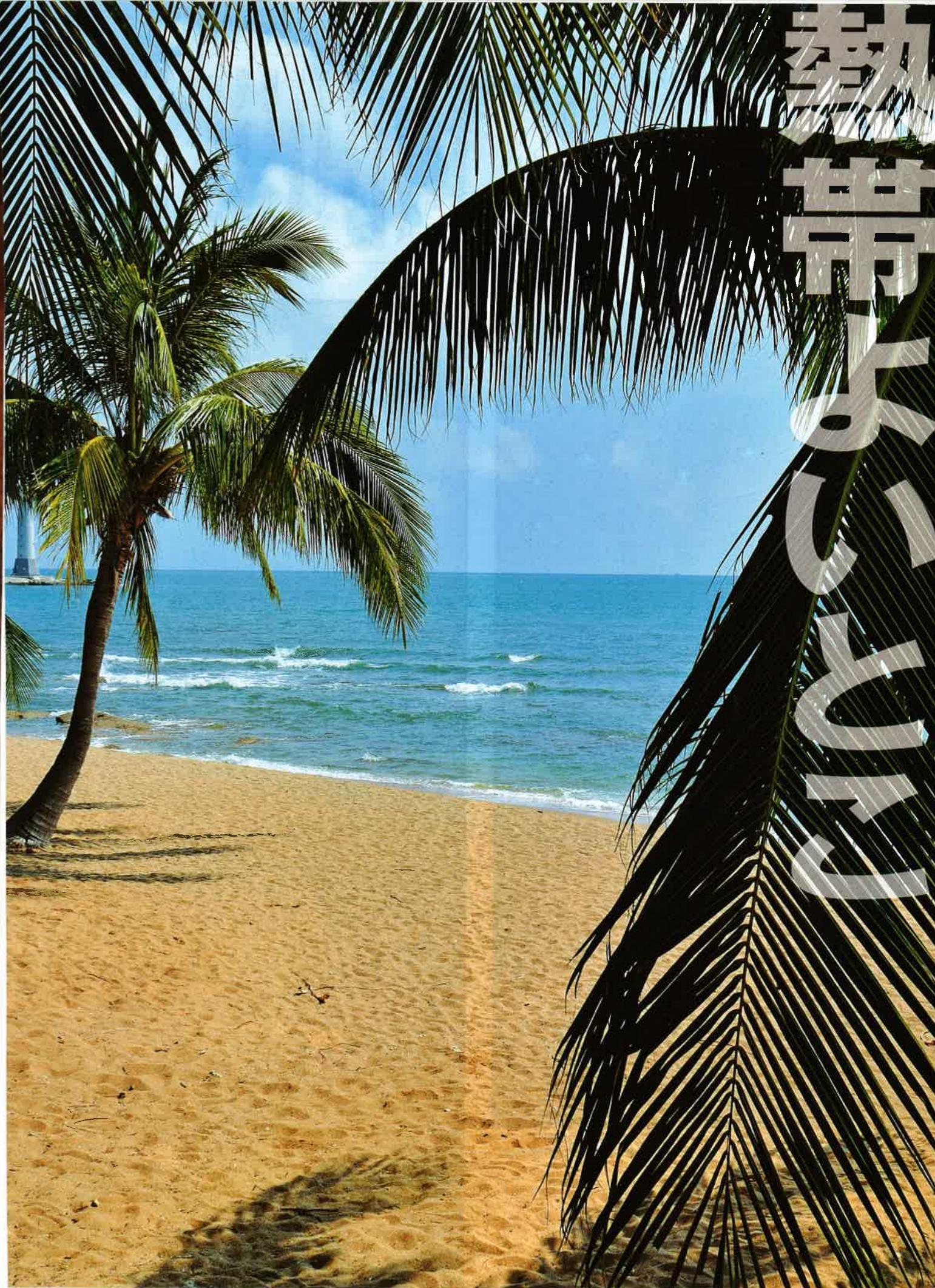


一度は
あひる





海南島 有往 有往 見物記

「海南島は中国最南端の島。面積では九州に迫るほど大きい。「国際観光島」としてリゾート開発に拍車がかかっている。

写真は「亞龍湾熱帶天堂森林公園」から望んだ亞龍湾の中心部。

旅行好きの人々の間で近ごろ、「中国の海南島がすごい」ともっぱらの噂。「東洋のハワイ」とも称される、いつたいどんな島なのか、はたしてどこがすごいのか、あちこち歩き回って見物してきた。

文=石川ミツノリ 写真=小竹直人

tex: Mitsunori Ishikawa photographs: Naoto Kotake
原地: Waking Guo-Jun
coordination: Waking Guo-Jun



発車の実に30秒前、男3人がやつこざ木一ムに駆け上がり、ゼエゼエ言いながら乗降口に向かう様子には、お堅い中国国鉄の駅員たちも笑いを隠せないのであった。

「な、なんとか間に合った……」重いスーツケースを引きずつて狭い通路をヨロヨロと歩き始めた

とき、列車はガタンと小さく揺れて、夜の広州駅を出発した。

せっかく海南島に行くのだから、ユニークな島入りを果たそうと選んだ寝台列車。中国本土を雷州半島の先端まで南下し、海峡を渡つて海南島に入る。ユニークなのは

その渡り方で、長い列車を2本に

船列車ごとで運ばれて



フェリーに積み込まれて海峡を渡った列車が、機関車に牽かれて海南島に上陸する。



車窓と船窓を通して眺める海もなかなか乙なもの。



海口には、かつて華僑たちが建てた洋風の建物が並ぶ一角がある。ちょっとヨーロッパ的で不思議な風景。



右／郊外に足を延ばすと、水牛が田とも池ともつかない湿地でまどろむ姿が見られる。
左／海の魚介を養殖する池に網を仕掛けたおばさん。大きなカニが獲れた。



海口駅を出ると、やがて車窓風景は緑一色に。熱帯性の植物が生い茂る中に、小さな集落も姿を現す。

を歩く。少し焦げくさい街の匂いと、お婆さんたちが道端でカードゲームに興じる光景に、「ここは中國なんだ」とあらためて実感。足を延ばした郊外に、水たまりのような池が広がっていた。人の姿を見つけて話を聞くと、海水を引いて海の魚介を養殖しているのだという。近くで水牛がまどろんでいる。水墨画で見たような、中國情緒あふれる風景。よみがえる「リゾート、あるのか?」の思いを胸に翌日、高速鉄道で三亞へ。



海口から三亞へは2010年開通の高速鉄道で東回りにひと走り。乗ってきた寝台列車の場合は西回りとなる。

早朝に行われるフェリーへの積み下ろしを見るため、食堂車でのビールもほどほどに寝台へ。白湯入りのポットだけが置かれたテーブル、硬めのベッド。どこをとつても中国だ。この先に評判のリゾートアイランドがあるなんて、本当だろうか。今ひとつピンとこないまま、まだおさまらない自分の鼓動を聞きながら浅く眠る。

目を覚ますと曇天の下、停車した列車の周囲で作業員が動いている。すでに列車は2本に切り離されて左右に並んでいる。すぐ横に見える普通席の車両には、若者と家族連れが大勢乗っている。王さんによると、お金を貯めて海南島に

に遊びに行く庶民の数は増加の一途をたどっており、東北地方の长春で旅行会社を営む王さんも、これまでに何度も東北から海南島へのツアーバーをガイドしたという。列車が機関車に押されてフェリーの中へ。ほとんど揺れもなく、気がついたら海の上。車外に出られないで、車窓と船窓を通して海を眺める。海の青さに、少しだけリゾートを感じる。そして50分後、船は海南島に無事、接岸。ふたたび列車が走り出すと間もなく「海口」の駅だ。ここで下車する。海口は古くから栄えた都市で、熱帯モンスーン気候のため一年を通して蒸し暑い。リゾートの本拠は島の反対側にある「三亞」だが、王さんによると海南島への旅行者は、まず海口に入つて1泊し、それから三亞に向かうケースが多いとか。歴史ある地方都市と現代的リゾートを両方、楽しむわけだ。

暑さに戸惑いながら古い街並み



海団には中国情緒が
あふれていた



上／海口の郊外、養殖池が集中するエリアの風景。
橋の風情が水墨画を彷彿させる。

下／上の写真の男性が網で捕獲した養殖の「福寿魚」。

小骨が多いが、身は淡泊でおいしい。



上／商店街の歩道にテーブルを並べてカードゲームに興じる。
海口のお婆さんたち。皆さん、とても爽な感じ。

下／海南島はいしの流刑地。

「五公祠」は唐・宋時代に

この地に流された5人の重臣たちを祀った史跡。





大東海は三亞でもっとも庶民的な雰囲気のビーチ。右の男性は現地ガイドの王国軍さん(本文参照)。



上／三亜の入り江にあるヨットハーバー。モーターボートから大きな双胴船まで、たくさんの高級船舶が係留されていた。
下／重慶からハネムーンで海南島にやってきた新婚さん。「また来たいです」。西島にて。



西側のプライベートビーチで欧洲人の滞在客たちが贅沢な時間を過ごしている様子をチラ見してから、大東海に行つてみた。ここはわりと庶民的なエリアで、大勢の中国人観光客が海水浴と浜遊びを楽しんでいる。ビーチバレーをしていた若者が二人、突然こちらに駆けてきて高速の腕立て伏せを始めた。「なんじや!?」と顔を見たら照れくさそうに笑う。どうやら失笑されてしまったようだ。

点の罰ゲームらしい。中国訪問は数回目だが、こんなに開けつ広げに、楽しそうに遊ぶ中国人を見るのは初めてだ。

そして三亜湾。九十九里浜（千葉県）の全部がリゾート的な、スケールでのかさが衝撃的だ。その沖合に浮かぶ西島も美しかった。亞龍湾にも優る白さの砂浜には何組ものカップルが遊ぶ。「ここが中國？」と、三亜に来るまでとは真逆の感想を抱きつつ、幸せそうにシルエット眺めたのだった。

東側を回つて三亜に至る。海口駅を発車した列車がスピードを上げるにつれて、風景はみるみるうちに緑一色になる。水田、椰子のプランテーション、熱帯性の植物が野放団に生い茂る森などが交互に現れ、それらの中に時折、黒い瓦屋根の集落が見える。南下するにつれて空は青くなる。なんて趣のある風景なんだろう。全力疾走した甲斐があつたというのだ。

三亜の駅に降り立つたとき、世界は変わっていた。空の青は息苦しいほど濃く、強い陽射しがじりじりと照りつけ、気温は優に30度オーバー。まさに「ザ・熱帯」。海南島は（ケッペンの気候区分によると）中国で唯一の熱帯で、海

口は熱帯モンスーン気候、三亜は熱帯サバナ気候に属する。そして三亜は海口より数段暑い。

さつそく肝心のリゾートへ。まず向かつたのは亞龍湾。三亜には代表的なビーチが3か所ある。東から順に亞龍湾、大東海、三亜湾だ。このうちもつとも美しいとされるのが亞龍湾で、欧米系の高級リゾートホテルが集中するエリアでもある。東西に長いビーチの中間に広場があつて（多くの施設の中心に広場が設けられているのが中国らしい）、観光バスがじやんじやん乗り付けている。広場の西側は高級ホテルのプライベートビーチが多いので、自由に入れる東側のビーチに下りてみた。

いきなり
熱帯出現のする
リゾート！

ぞ「ザ・リゾート」！
王さんが靴を脱いでズボンをま
くり、波打ち際へと歩く。頭には
先ほど露店で買った、テンガロン
ハット型の麦わら帽子。上海で落
ち合つたときから王さんは、木々
の緑を見てうれしそうだった。5
月初旬の東北地方では、まだ冬の

いきなり
熱帯の出現する
ゾーン



ビーチの近くから内陸部まで、三亜のいたるところに濃い緑に囲まれた、閑静な高級別荘地が広がっている。



三亜湾沖の西島でココナツジュースを楽しむ中国人の女性一行。金曜の夜に来て日曜の夜に帰るパターンで、たびたび海南島を訪れるという。



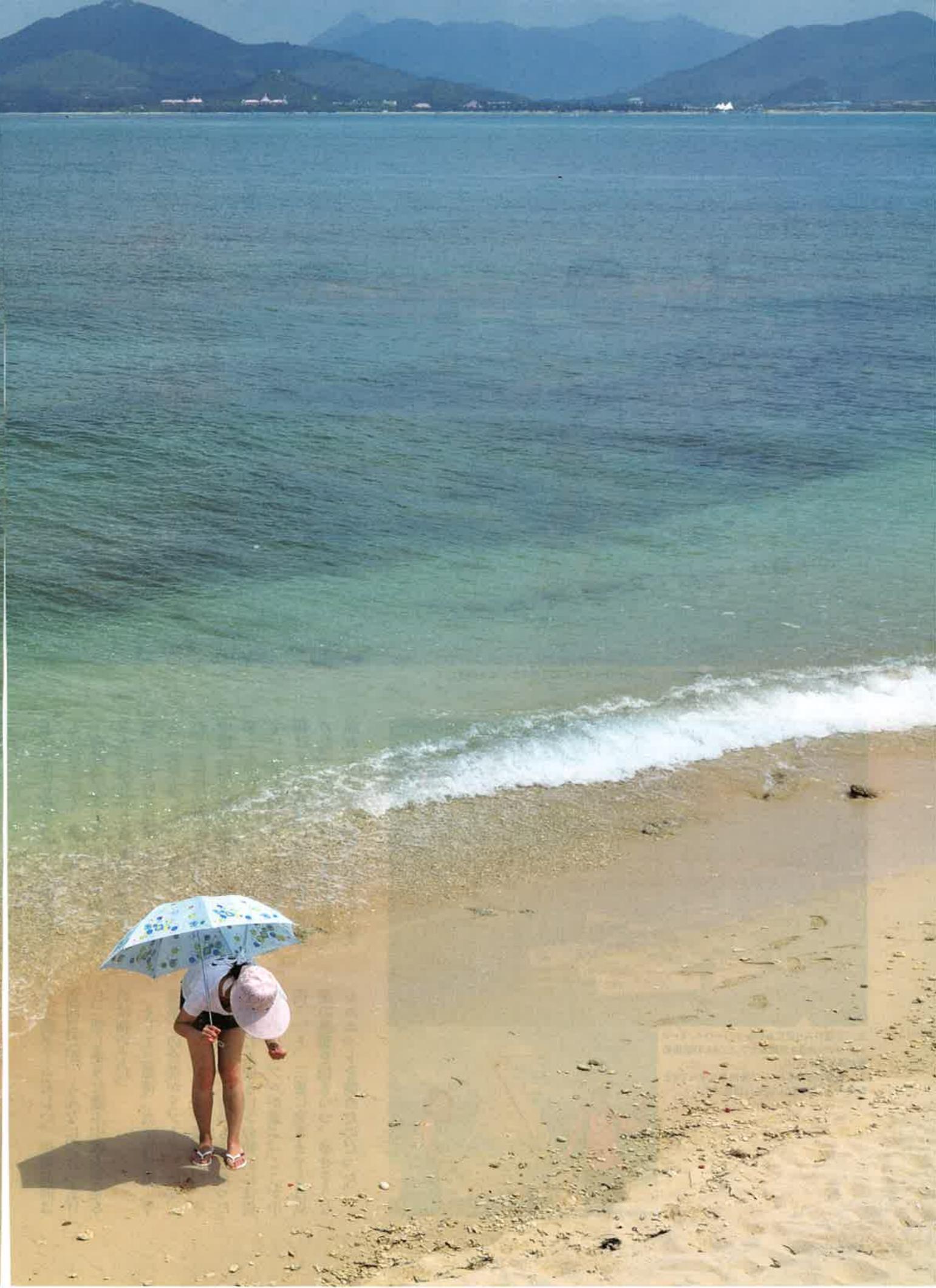
新幹線の三亞駅は真新しい巨大建造物。目の当たりにすると、その大きさに驚かざるを得ない。いかにも国家の威信をかけたという感じ。

白くキメ細かい砂と、ほぼターコイズブルーの海。沖へ行くと紺に近くなり、浜辺に近づくと砂が混じつてミルク色に濁るから、3色のストライプに見える。こりや美しい。遊泳区域では老若男女が遊び、椰子の木陰やパラソルの下でのんびり過ごす人もいる。これ



ここが中国？

三亜湾に浮かぶ西島のビーチはことのはか美しい。波打ち際には幸せそうなカップルの姿が。



海南島の名物として真っ先に挙げられるのが、海口近くの文昌市で飼育される「文昌鶏」。シンプルに蒸して食すのが代表的な楽しみ方。肉質は軟らかすぎず硬すぎず、噛むほどに旨味が滲み出る。ぱりぱりとした皮も実においしい。健康な地鶏ならではの味わいだ。これを鶏スープで炊いたご飯に添えれば、近ごろ日本でもメジャー化しつつある「海南鶏飯」になる。

文昌鶏

おいしい休憩 海南島の必食3題

東山羊

「ひがし・やぎ」ではなく「とうざん・ひつじ」。海南島の特産で、羊肉好きの中国人の間でも一目置かれる食材だ。羊特有の匂いがなく、あっさりしているので箸が進む。ガイドの王さんに感想を聞いてみたところ、「羊は内モンゴル産がいちばんだと思いますが、この羊もとてもおいしい」ということ。茹でて食べるのもおすすめのようだ。

右／ぶつ切り肉(骨つき)の煮込みは見かけよりあっさりした味。中／腸の炒めもの。臭みがなくておいしい。左／肉料理には野菜も欲しい、ということで独特の形をした「四角豆」の炒めものを。海南島は野菜も旨い。すべて三亜のレストランにて。



カニに代表される海鮮も海南島の名物の一つ。多くのレストランが生け簀を備え、食材を選べるようになっている。基本的に何を選んでもおいしい。素材の味を生かすため、調理法はシンプルなものがおすすめ。三亜にはレベルの高い海鮮レストランが少なくない。リゾート地ということで中国本土よりやや割高だが、かなり多彩な食材がそろっている。海鮮市場で食材を選んで「加工店」に持ち込み、調理してもらう方法もあるが、海鮮レストランに比べると味付けが单调になる傾向がある。じっくりと料理を楽しみたいなら、まずは海鮮レストランに足を運ぶことを勧めたい。



上／三亜の海鮮市場で販売員のお姉さんが勧めてくれたトコブシ。加工店に持ち込んだらエスカルゴ風の味付けで出てきた。右上／上写真の巨大ワタリガニを茹でるところ。肉も内子もこっくりとしておいしかった。右下／ウニの茶碗蒸し。カニとウニは三亜の海鮮レストランにて。



左／海南島のカニといえば上海蟹に似た「和楽蟹」が有名だが、三亜の海鮮レストランで見つけたのは巨大ワタリガニ風のこれ。下／白身魚の清蒸(蒸し料理)はどこで注文してもハズなし。三亜にて。



文昌鶏を看板にするレストランは海口、三亜のどちらにも数多くある。
写真は海口のレストランのもので、濃いめの鶏スープをかけ回したのちにかぶりつくスタイル。





「檳榔谷」にて、ミャオ族ギャルズが勢ぞろい。45ページの彼女も仲間だ。ミャオ族は竹や銀を用いた工芸に長けている。

三亜は確かにすごいビーチリゾートだった。だがそれだけでは終わらない。リゾートもいいが、海南島だけにしかない何かに出会ってみたい。それは、たとえば少数民族。海南島はリー族（黎族）、ミャオ族（苗族）の暮らす島としても知られているのだ。

手つとり早く彼らに会うには、「檳榔谷」に行くとよい。ここは三亜市街から島の山岳地帯に向かって少し登ったあたりにある大きな施設で、熱帯雨林に限りなく近い森の中にリー族とミャオ族の伝

統的な生活様式を再現した、いわば少数民族のテーマパークだ。園内のガイドや、機織り・工芸・舞踏などを披露するパフォーマーたちも多くが少数民族の方々のよう。きりっと整った顔立ちの彼らが美しい民族衣装に身を包み、親指を立てる独特的の挨拶をしながらこやかに接してくれる。リー族の織物は特に見事で目を奪われる。

だが、ここはあくまでテーマパーク。どうせなら檳榔谷に「勤務」する人々が帰る家のある、現代の少数民族村を訪ねてみたくな



海南島の最高峰、五指山。とがった先端が少し曲がった、鳥帽子のような形をしている。麓の五指山市には少数民族が多く暮らす。

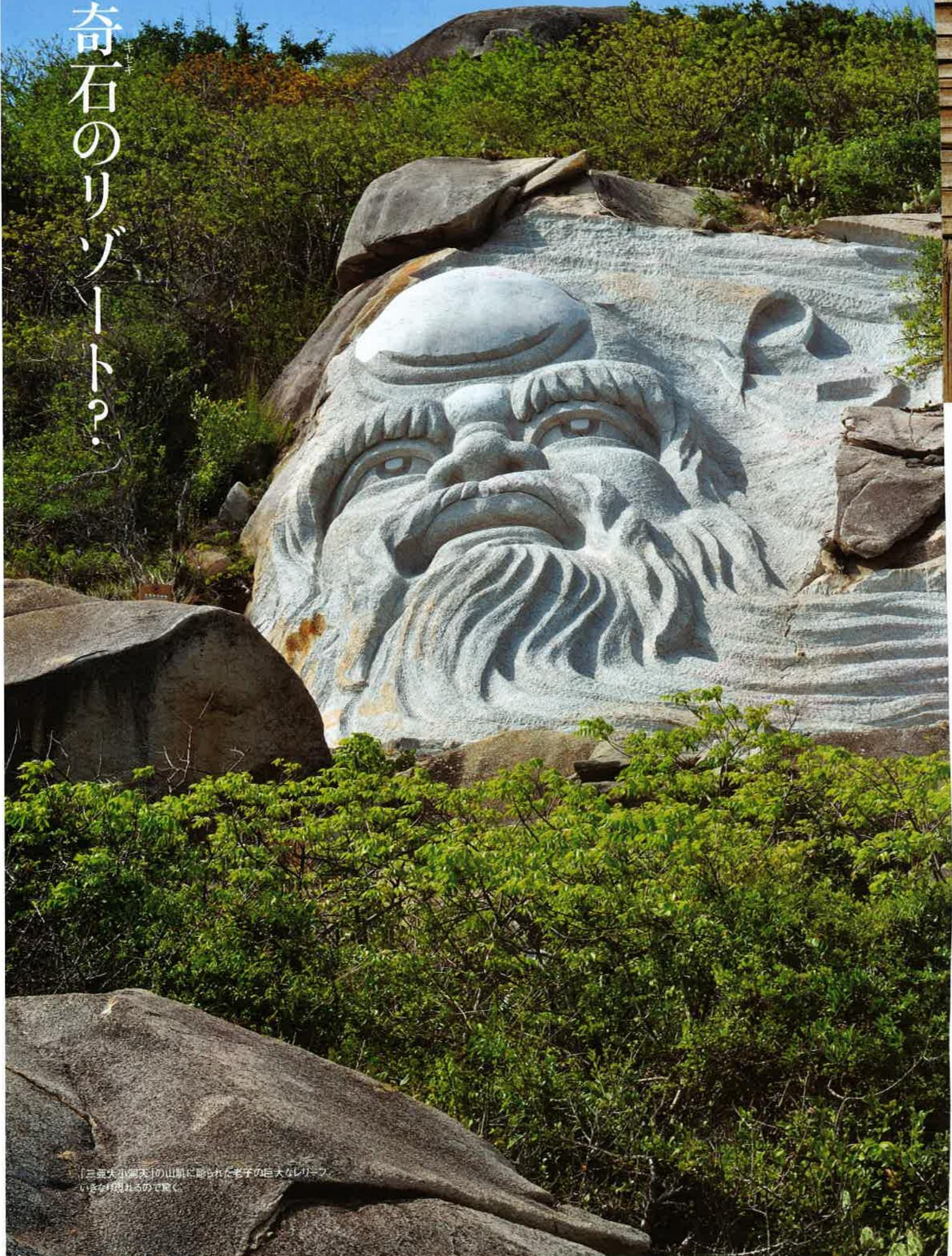
少数民族ラブ！

つた。そこでタクシーをチャーターシー、海南島の最高峰「五指山」を目指して山岳地帯に踏み込むことに。その麓にある五指山市の周辺は、少数民族の人口が漢族に迫るほど多いのだ。

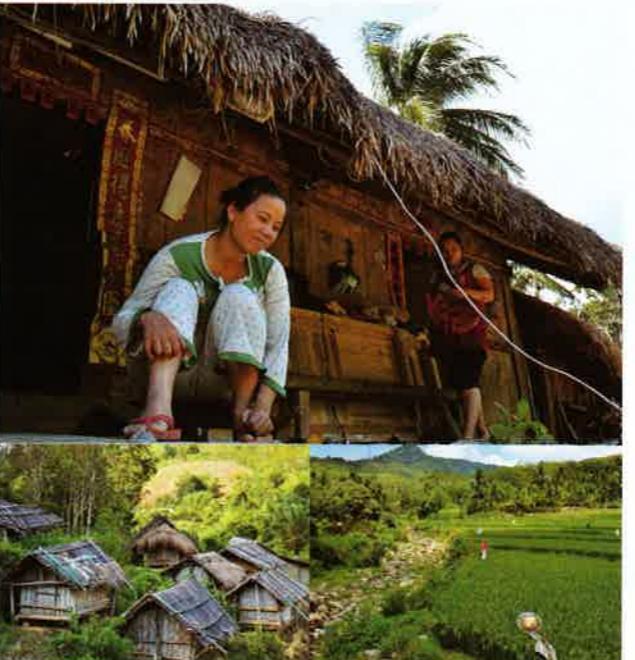
たまたまタクシードライバーが東北地方の出身ということで、王さんと二人、えらく話が盛り上がりっている。「ほかの地域から移住してきた人のほうが地元民よりも働く」なんて、おいおい先祖代々の島民が聞いたら怒り出すぐ。もつとも中国人は出身地に対しても

奇石のリゾート? キセキ

「亞大小鶴天」の山肌に廻られた老子の巨大なレリーフ
と見られるので驚く。



右／あちこちに咲いているブーゲンビリアは中国語で「三角梅」。左／たどり着いた村の貯蔵庫の壁。竹を編んで造られている。



上／村について詳しく教えてくれた女性（左）。バジャマ姿でくつろいでいるところにお邪魔したにもかかわらず、とてもオーブンに接してくれた。右下／五指山周辺の里の風景。自然の地形を利用した小さな田んぼの雰囲気が日本の田舎にそっくり。左下／村の入口に密集して立っている高床式の貯蔵庫。タイムスリップしたような光景だった。



町の小学校から村に帰る子どもたちに遭遇。毎日、片道1時間以上かけて通学するという。

下で村人がくつろいでいる。
若い女性（美人）に王さんが話
しかける。彼女によると、コンク
リートの家はお金がかかるため、
手造りの家で昔ながらの生活をし
ているということ。今は結婚して
家にいるが、以前は彼女も檳榔谷
でアルバイトしていたそうだ。民
族衣装は着ないのかと尋ねたら、
「あれは農作業しにくいもの」。何
ごとも高望みは禁物だ。

年配の村人に声をかけても、そ
のほとんどは言葉が通じない。学
校で中国の標準語を習った世代で
なくてはコミュニケーションも難
しいのだ。斜面に沿つて雛壇状に
建てられた家々の間では、ヒヨコ
を率いた鶏たちが餌をついばんで
いる。別の時間が流れる村で、中
國の奥深さをあらためて思う。

ら、一帯をあちらこちらに走り回る。烏帽子のような形の五指山が、右に見えたり左になつたり。そのうちどうにか「この先だよ」という有力情報ゲットして車を進めると、狭い未舗装路の果てにようやく、その村が姿を現した。

「……ザ・少数民族！」

漫画家の水木しげる先生が描く南方の風景に出てくるような、木と竹で造られた高床式の貯蔵庫が

山岳地帯といつても道は舗装路
山間をどこまでも走つて北に抜け
れば海口に至る位置関係だ。標高
でも高いプライドを持つてゐるか
ら、その種の話はよく耳にする。

「……ザ・少数民族！」



「亞流灣熱帶天堂森林公園」の山道で、結託して対向車を驚かせる乗客たち。

オーッ! オー! 観光バス。ホットのオーパレード

（写真）。山道でバスがすれ違う瞬間、乗客全員で「オーッ」と叫んで相手を驚かせるのが『お約束』のようだ。悔しいが最初は見事に驚かされた。

「三亞南山大小洞天」は、下の隙間に人が入れる巨大な奇石「小洞天」を中心、老莊思想にまつわる巨大彫刻、さまざまな寺社などを散策できる施設。「南湾猿島」は野生の猿がたくさんいる島で、島に渡るロープウェーからは「蛋家人」と呼ばれる人々が水上生活を営む様子も見られるという、実際にハイパーな複合施設だ。このほか

「鹿回头公園」「天涯海角風景区」など、名所には事欠かない。

巨大な観音像もあるというので行ってみたら、入り口がタクシーで渋滞中。ちっとも動かないで王さんが確認したところ、「入場券の在庫が切れたので取りにいってある」という。こういうことは、日本ではまず体験できない出来事なので、逆におもしろかつたりする。

暑さにヒーコラ言いながらも、こうした施設を巡っていると「観光している」という気分が盛り上がり、なかなか悪くないのだつた。



上／「三亞南山大小洞天」の中心となる「小洞天」は海岸にある大きな奇石。腰をかがめると下の空間に入れる。



ふたたび三亞のリゾートエリアに戻り、ビーチ以外のスポットをチェックすることにした。三亞にはビーチを取り囲むように、さまざまな観光施設が設けられている。それらは檳榔谷がそうであつたように、テーマパークと呼んでも差し支えのない規模だ。「中国のテーマパーク」というと若干の脱力感

を覚える方もおられるかもしれないが、少なくとも三亞のそれはかなりクオリティが高い。

主な施設を紹介すると、まずは「亞流灣熱帶天堂森林公園」。オープニングエアの小型バス（ほかの施設でもしばしば見かける）に乗つて急な山道を登ると、頂上から亞龍湾を一望できる（46～47ページの



右ページ／「南湾猿島」に渡るロープウェーからは、伝統的に水上生活を送る「疍家人」（広州からやってきた漢族の移民）の家々を望める。





中国流

突然始まったサーチライトショー。三亜の夜は全体的にブルー系の輝きを放って美しい。リゾート気分も高まろうというものだ。

ナイトライフも



三亜湾の東端、三亜港の入り口に位置する巨大な人工島「鳳凰島」に明かりが灯る。建造中の5棟の高層ビルにもしっかりと電飾が。島は橋で陸とつながっている。

このように昼もよし、夜もよしの三亜だが、そのすべてを楽しむためには、「中国が好き」であることがポイントになるとと思われる。たしかに緯度といい、白いビーチといい、海南島はハワイに似ている。だが海南島にはロコたちが経営する欧米的なショッピングモールはない。あるのは海口で強く感じた中国情緒の延長線上に位置する、とめどない活気と混沌だ。大きなリゾートホテルの中にいるだけでも十分にリゾート気分味わうことはできるだろうが、中国の人々が楽しそうにはしゃぐ浜辺や街の中に身を置いたとき、海南島がどんな場所なのかがわかる。ここはよくあるリゾートではない。ほかでもない、文字どおりの「中国のリゾート」なのだ。

ごつた返す夕刻の海鮮市場で、ものすごく元気なお姉さんにカニとイセエビとトコブシとアサリを勧められた。主に観光客相手の市場なので多少、割高なのは承知の上。購入して加工店に持ち込み、適当に調理してもらつてビールで乾杯。プラスチックのテーブルとイスがギシギシいうのが少々気になるが（前日に五指山市の食堂で同様のイスに座つたところ、脚がグニッとするだけで直後ろにひっくり返つた）、楽しいし、おいしい



交差点の一角を埋めつくした、野菜満載のリヤカー。これだけの量が毎晩、2~3時間のうちにすべて売れていくというから驚きだ。

から、まあいいや。夕食を終えてホテルに戻る途中、野菜を山積みにしたりヤカーガ何十台も集まって、大きな交差点の一角を占領しているのに出くわした。いっさい何ごとかと思えば、農家の人々がここで仲買人を待っているのだという。野菜の栽培も盛んな海南島だけに、どの野菜も新鮮でおいしそうだ。どうなるの



上／海鮮市場近くの加工店街。大勢の人が練り出して、夜ごとお祭り状態。左／加工店で食事をしていると、流しの女性ギタリストが電源とアンプを牽いてやってきた。試しに1曲頼んでみたところ、サービスで日本の演歌「北の宿から」も歌ってくれた。

三亜湾の人工島「鳳凰島」にイルミネーションが灯り、サーチライトが夜の空を駆けめぐる。ビーチ沿いの海の家では、深夜までパーティが開かれるとも聞いた。

长春大学で教鞭をとることもある都会派エリートの王さんにして、なにかを見て笑った回数は連れの日本人2名より明らかに多く、デジカメで撮った写真の枚数はカメラマン氏を凌ぐ。一緒にいる「こちらも楽しまないとな」と、実に前向きな気分になる。

夜は夜で、街は「中国的」になると「こちらも楽しまないとな」と、実に前向きな気分になる。

また来たい島



夕刻の大東海。過ぎていく時間を惜しむように、大勢の人々がいつまでも波打ち際で戯れていた。



亜龍湾の東に位置する海棠湾という無人の砂浜に、王さんが連れてくれた。
「ここは最近、開発が始まつたビーチです。すでに近くには有名な高級ホテルが開業しています」
砂が亜龍湾よりも美しいため、完成すれば海南島の最高級ビーチリゾートになる予定だという。

日本人にはピンとこないスケールとスピード感だ。10年ほど前に三亜を訪れたことのあるカメラマン氏いわく、当時の面影は「なにひとつ」残っていないそうだ。

海南島はこれから、どんな場所になっていくのだろう。どれだけの数の人々がここにやつてきて、遊び、笑い、そしてふたたび日常へと戻っていくのだろう。

右往左往しながら走り回った昨日までは、規模の大きさと要素の多彩さに目が眩み、「まとまりのつかない島だな」とすら感じていたのに、いざ帰る段になると、正直言つて全然、帰りたくない。明日も明後日もここにいたい。仕方がないから帰るけれども、来年の夏、また来たい。

……ん？　ここは常夏なんだから夏まで待つ必要、ないじやん。
というわけで、またすぐ来ますから、海南島。